

ちよつとしい話

～往生～

善導大師はその著の中で

「ていずうらいぶつざいしこくがんおうじょうこずいにゅうみだかいわりょうらく低頭禮佛在此国願往生拏頭已入弥陀界無量樂」の一文あり。この説によれば往生したいと願う人が、頭お下げて阿弥陀様を拝んだのは娑婆の世界であるけれども頭を上げてみれば即ち阿弥陀様のところ極樂浄土に入っていると言う事です。ですから、とても安易な内容に取れてしまいません。少し考えて見ますと、私達が毎日社会生活を営んでいる中で、この文章にある様な実感を会得できる人はごく少ないと言うことが解るでしょう。「くわんむりやうじやう觀無量寿經」の中にも私達の往生には九段階ある事をお示し下さいました。「もくとくおうじやう即得往生」です。即ちすぐさま往生できる旨の説明と言うことでありますが、その説明の箇所のみを信じるのはとても危険です。村上しんずい眞瑞上人も「我々凡夫が亡者に対して即得往生できたか、否かを判断する事は大変危険なことなのではないだろうか、阿弥陀様の本願力は分け隔てなく全ての衆生に注がれているが、気がつかないまま亡くなった者は往生できないのである。」と言ってみえます。前述したごとく現代社会の生活は多事多様にて時間的、心性的ゆとりも少なく、ましてや布施行等、実践仏事にいそ勤しむ時間は無いに等しいと思われまます。しかしながら私達が娑婆において頂いているこの生命には限りがあり、「一寸先は闇」にして予知する事は不可能に近いのであります。ただ自意識もなく病院のベッドに横たえ医者から死亡宣告を待つ身の人々も大勢みえます。これ等の事から私達は毎日を大切に、少なからず精一杯の勤行をしたいものです。法然上人様もこの事に一抹の不安を抱かれ一心に専ら阿弥陀様を念じ、ただひたすらにお念佛を称えなさいといましめ戒めのお諭しをされたのです。法然上人のお考えの根底には阿弥陀佛のみな御名を称える事の説明をした最も古い經典、「はんじゆざんまいきやう般舟三昧經」があります。そのお経にいわく曰く「阿弥陀佛いわく、我が国に來生せんと欲せば常に我が名を念ぜよ、しばしばまさに専念して休息あることなかるべし、かくのごとくせば我が国に來生することを得ん。」とあります。現代社会の礼節が簡略かの傾向にあると同様に、仏教教義も段々簡略化されてしまいました。物事を省くばかりを進化とするのは余りにも危険が多く、私たちの生活基盤も沈下してしまうにちがいありません。樂あれば苦あり、苦あれば樂あり、信心堅固にして一步一步、また一步。健康を害してからでは遅すぎますよ。

善入院油掛地藏尊